

2010年度社友会総会・懇親会開催のお知らせ

開 催 日 ; 2010年 7 月 24 日(土曜日) 12:00~14:00 (開場 11:30)

会 場 ; 「如水会館」(昨年と同じ場所です)
千代田区一ツ橋 2-1-1 TEL. 03-3261-1101
スターホール 2 階・クロークは 1 Fのみです。

アクセス ; 地下鉄:東西線竹橋駅 1b出口より徒歩 4 分
都営三田線、都営新宿線、半蔵門線 神保町駅下車
A 9 番出口は白山通りの反対側に出ますが、エレベーター、があります。

会 費 ; 当日会費 3,000 円、

出欠の確認 ; 会場の手配の都合上 6 月 20 までに同封の返信用はがきに必要事項ご記入
のうえ投函願います
尚、E-mail ご希望の場合は下記アドレスまで氏名、住所、電話番号記入
のうえ、出欠の確認をお願いします。

そ の 他 ; 昨年同様に会員の本田 務さん率いるハワイアンバンドの演奏と美女 3
人によるフラダンスのアトラクション
会員の京野勉さんより秋田の美酒爛漫寄贈あり。鏡開きの後杓で乾杯を

ニチメン東京社友会事務局
E-mail アドレス menkwa@sojitz.com



2010年度新年賀詞交歓会報告

世話人 塚 本 幸 雄

昨年後半の世界的金融不安に端を発した日本の経済停滞が報じられる中、ニチメン東京社友会による2010年度第三回「新年賀詞交歓会」は1月18日（月）に開催されました。

季節柄懸念された天候はやや寒いながらも曇天に留まり会場の双日㈱本社西館7階の大会議室には定刻前から旧交をあたため新年を祝う多数の社友の皆さんが参集し最終的には145名の皆さんの出席となりました。

12時には双日の土橋会長以下9名の役員・社員の方々が出席され開幕となり、司会には昨年に引き続き旧原動機部出身の小堀裕子さんをお願いしましたが いつもながらの華やかな雰囲気醸し出され行事のスムーズな進行をみました。

冒頭、丸山会長の挨拶に続き来賓の土橋会長にはご挨拶の後ご出席の役員のご紹介があり、引き続きご長寿の方々への表彰が行われました。

今年は対象の方々は7名でしたが出席されましたのは、河西郁夫さんと北村俊夫さんのお二人で、河西さんには乾杯のご発声と北村さんにはご挨拶をいただきましたがご都合つかずご欠席となりました5名の皆様にはご健勝とご長寿をお祈りする次第です。

しばらくご歓談の後、今回初めて余興として世話人の浜口信恭さんから新年を賀す和歌と詩吟の朗詠が披露され宴もたけなわとなる頃 予定の1時半には島崎京一さんによる中締めにより行事を無事終了する運びとなり2時には再会を約し散会となりました。

因みに島崎さんは 昨年12月に急逝されました岩田昭二前副会長の後任として同日付にて副会長に就任されましたのでこの機会にご報告申し上げます。

最後になりましたが 会場を提供していただいた双日本社と設営にご支援いただいた関係者の皆さんには感謝申し上げるとともに 会の運営にあたりご協力・ご尽力いただいた今井恵子さん、増川恵子さん、さらに司会役の小堀裕子さんには大変お世話になりました。

有難うございました

以 上

新年会恒例の長寿者の祝いは、今年は1912年のお生まれの白寿の方、1923年お生まれの米寿の方が対象ですが、白寿の方はおらず、米寿は、以下の7名の方々でした。

井 本 公 一 樋 口 秀 雄 河 西 郁 夫 北 村 俊 夫
大 村 讓 鈴 木 明 川 崎 清

当日、新年会にご出席頂けたのは、河西郁夫、北村俊夫のお二人で、会場に於いて、河西良治社友会副会長よりお祝いのギフト券を贈呈致しました。ご欠席の5名の方々には、後日ご自宅宛お送り致しました。

尚、ギフト券贈呈後、米寿の方々を代表し、北村俊夫殿よりご挨拶を頂きました。

賀詞交歓会 会場風景



挨拶 於 新年会賀詞交歓会

会 長 丸 山 修 作



皆さん、あけましておめでとうございます。

寒い中、多数の会員の方にお見えいただき、感謝しております。

今年も双日株式会社のご好意によりこの事務所をお借りして新年会を開催させて頂いております。

本日は双日から土橋会長ほか幹部の方々にもご出席いただきまして心より御礼申し上げます。

さて、去年は色々なことが内外で起りました。

特に我々の最大の関心事は、米国に於ける史上初の黒人大統領オバマ氏の誕生であります。それはさておき、国内に於いては、民主党による新政権、政権交代ということが起りました。発足すでに4ヶ月になりますが、

すでに色々と政治・経済・外交・防衛、各面に於いて問題を続出しております。

果たしてこの政権が一定の期間の間に我々国民の期待に添う成果を出し得るのか、また、この政権交代が我々国民のベストの選択であったのか、ということが問われる本年ではないかと思えます。

依然として経済は不況の真只中、トンネルの先が中々見えて参りません。

企業の経営についても大変厳しい年が予想されます。

双日株式会社の変らぬご奮闘を期待したいところであります。

そんな状況下、我がニチメン東京社友会は、このような新年会、また夏の総会、ホームページや会報の充実などを通じまして、会員の皆さんとの親睦の一層の強化に努めて参りました。

しかしその間、極め付きの痛恨事が発生致しました。

本社友会発足前より、その誕生、また、その後の運営について、献身的な努力をして頂きました岩田副会長が、昨年11月末、お亡くなりになりました。

社友会の重鎮である岩田副会長の突然の死は、我々にとり多大の打撃ではありますが、これにめげることなく、引き続き社友会の更なる発展に努めて参りたいと思えます。

この機に、岩田副会長のご冥福をお祈りしたいと思います。

皆さん、寒さはまだ続きます。どうぞご健康に留意され、ご家族をはじめ御一家のご多幸を心よりお祈り致しまして、挨拶に代えさせて頂きます。どうも有難うございました。

(了)

ニチメン東京社友会・新年賀詞交歓会

双日(株)会長 土 橋 昭 夫



鏡開きも終わりました、新年も早18日目を数えております。
遅ればせながら、皆様、新年あけましておめでとうございます。

先ほど丸山会長から経済情勢のお話を頂きましたが、当社を取り巻く環境も大変厳しい状況にあります。日本経済は、2009年度の第1四半期をボトムとしまして回復しつつある基調にはありますが、まだまだ自立的な回復軌道には乗ったとはいえ、今年も大変厳しい1年になろうかと思っております。雇用情勢の悪さ、所得の伸び悩み、政治の混迷、デフレの進行等々、最近では景気の2番底という言葉までさやかれておる状況でございます。

しかしながら、世界に目を向けますと、中国を始めとする新興の成長国の経済が著しく発展していることは、皆さんご高承の通りでございます。なかでも、中国の発展というものは、目を見張るものがあります。中国はリーマン・ショックからいち早く脱却し、いまや世界の経済を牽引しているといっても過言ではないかと思っております。かつては日本、欧米がリードしてきた世界経済は、中国をはじめインド、ブラジル等の新興成長国がリードする構造に変わってきております。

昨年の暮れに北京を、また先週はインドネシアを訪問してまいりましたが、お会いする政府の要人、実業界の方々など、皆自信に満ちており、今の夫々の国の勢いを正に肌で実感してまいりました。

日本は、ますますの少子化・高齢化という状況下であり、成長戦略を描くのが大変難しくなってきております。そこで、こうした新興国の成長に当社も絡み、そのような国々と成長を共にして、収益を取り込んでいくことが重要と思っております。当社は、今後成長が期待される国・地域（中国、インドをはじめとするアジア、ブラジル、アフリカ）、また期待される産業分野（新エネルギー・環境、農業）といったところに経営資源を投入していく所存です。先進国の閉塞感が漂うなかで、いま申し上げた新興国は正にダイナミックにアクティブに動いております。今後、日本の企業の海外シフトもどんどん進んでいくと思います。そのような状況の中では、我々商社が持つ海外ネットワーク、また営業インフラというものが機能し、お役に立つものと思います。従い、海外に進出する企業のお手伝い、或いは一歩先に海外に出て、そこで日本の企業を迎える、という展開が必要になってくるものと思います。

今年一年も、大変厳しい年になろうかと思いますが、役職員一同、一丸となってこの難局を乗り切って行きたいと思っております。皆様方におかれましては、引き続き、ご支援・ご声援のほどを宜しくお願い申し上げます。

結びにあたりまして、ニチメン東京社友会のますますのご発展と、また本日ご列席の皆様方の末永きご健勝を祈願致しまして、新年のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(了)

ご長寿お祝い表彰会員挨拶

表彰会員代表 北 村 俊 夫



あけましておめでとうございます。

本日は僭越ではございますが、代表してご挨拶申し上げます。

その前にお断り、お詫び申し上げますのは、わたくし96年に脳梗塞を患いまして右半身が一寸不自由なんでございます。そんな関係でボタンの掛け外しがどうしても出来ない、ということで、こんな服装でお目にかかることになりまして、誠に申し訳なく存じております。

私ども一同は十分健康に留意して、これからの余生を悔いなく楽しく全うしたいと願っておりますので、今後とも宜しくお付き合いをお願い致します。

私は、1960年田附株式会社の合併により、ニチメンの社員になりました。最初大阪合成繊維部に配属になりましたが直ぐに東京勤務となり、東京では繊維部、経理部、東京機械総務部に勤務致しまして、無事定年を迎え、

今日に至っている次第でございます。

経理部時代には、丁度経理処理の機械化が進められておりました時期で、そんな関係で、各営業本部の経理担当の方々には大変お世話になった次第でございます。

また、機械総務部の時代は、ちょうど機械本部に毎年7－8名の新入社員が配属になりました。で、東京機械本部では、一応全員を総務部でお預かりして、2年前後事務部門を経験してもらってから各営業部へ配属する、というシステムが採られておりました。

そんな関係で新人教育は非常に苦勞もありましたが、やり甲斐を持って勤めさせてもらった次第でございます。

また、同好会ではゴルフ部におりました関係で、千葉パブリックゴルフコースを借り上げて、東京ゴルフ大会というのを開催するのに携わりました。不行き届きで色々ご迷惑をおかけしたと存じますが、曲がりなりにも開催出来たこと、など、私のささやかな思い出でございますがご披露申し上げて、お礼のことばにさせていただきます。

終りに臨みまして、双日の更なるご発展と社友の皆さま方のご健康を心よりお祈りしております。

また、昨日1月17日は皆さんご存知のとおり、15年前の関西淡路大震災15年目の記念日にあたったわけです。大変な被害で、お亡くなりになられた方、また被災された方々に蔭ながらお祈り、お見舞いを致した次第でございます。

私の年代は丁度関東大震災の年ですので、奇しくもこの震災というものに非常に関心を持っている次第でございますが、本当に震災には十分な備えをしてもなお、被害を受けるということでございますので、日頃から十分心がけたいと存じております。

本日は誠に有難うございました。

(了)

平成22年 1月18日開催 賀詞交換会 出席者名

(敬称略)

〔社友会会員〕 弥彦治 廣晨清 格道一 雄保夫 雄夫一 昭雄利生子 勇良生 治雄作 雄男也次 夫治司 雄彦勲 巳子 徳夫 明三 夫雄 彌勝介 幸 伸司
 あ 木井子 利崎島田本澤井川 藤村居田藤北保塚西野野場平森山島本野 西田 條崎西畑津嶋村城田又持田西林林 枝井
 青浅浅甘新幾池池石石石泉伊今岩岩遠大大大大大大大大岡沖小 河河勝上唐川川木喜北金窪倉倉栗小小小 三坂

一弘次 美義一人也 郎久夫一 昭晃 徳一久 宏男子 雄子久 雄治 勇喜行 一郎 郎郎男男弘三 明覚一彦 洋郎 雄勇 恭人 享己 洋介
 潤 統克 京武 哲利 佳郁 宏忠 正亨 恒允 善秀 泰順 昌幸 慎 啓政 舜十 憲捷 昭照 松 信 昭春 川和 俊栄 信義 克東 龍
 井原藤一 谷崎水石 沼本定生 藤山 原木木 瀬瀬田 野村村本川 橋木根 尾川島部村村村野 賀爪島本谷 澤崎生口 林澤原尾
 桜笹佐三 洪島清白 菅杉祐 菅須陶 大高 高高高高高田田 塚利土 豊豊 中中名南西西西庭 芳橋羽橋長花 花埴浜林半久日平

雄夫郎也 孝明三 務雄 生次一 則作 夫幸三 博武児 孝光治一郎 孝郎 夫浩 健よ 稔晴
 幹孝 雄昌 直泰 登志 洋俊 憲理 修敏 英博 靖健 一富 陽浩 良莊 秀 ち 邦
 岡田田本尾 富野田間 山尾本 山嶋野江 浦井江 島口口邑本口 浅川川木弘水本
 廣廣廣廣深福藤本本 牧樹松松丸三水 溝宮村森 矢山山山山山湯吉吉吉吉吉吉
 〔双日役員〕 夫夫志孝尚 昭良正
 〔双日関係者〕 郎猛夫子 龍太 栄
 〔支援・協力者〕 子子子 井堀川 恵裕 恵
 今小増

(合計 145名)

OB 会 の 開 催 予 定

2010年度のOB会の開催予定は以下のとおりです。

OB会名	日付	開催場所
ニチメン慶応会	6月19日（土）	八重洲富士屋ホテル
ニチメン東京社友会	7月24日（土）	如水会館
ニチメン東京化工OB会	10月15日（金）	東洋レストラン
ニチメン機友会	10月23日（土）	八重洲富士屋ホテル
ニチメンチームズ会	未定	未定

[illegible]

OB会便り

第16回食料OB会 報告

倉持次雄

第16回食料OB会は2010年4月17日（土）、如水会館のレストラン「ジュピター」で行ないました。

桜も盛りを越えたこの日の朝、41年ぶりという時期外れの雪に見舞われましたが、予定した参加者49人は定刻までに全員参集しました。

池田世話人代表の司会進行で始め、開会の辞（倉持）の後、本日出席の最年長たる諸橋良吉さんのご発声で乾杯を終えるや、早速宴に入りました。

会場の内には随所に歓談と笑い声の塊が生まれて宴もたけなわの頃に、沖寅市さんのひと言、次いで淑女代表として桜井妙子さんのご挨拶、と会場の中の一体感はいよいよ盛んになりました。

現役からは双日㈱生活産業部門食料担当部門長補佐の吉川正晃さんに参加願い、会社の現況と我が後輩諸君の活躍のことなどを、様々お話して頂きました。

今回も会場設営ほか準備万端すべて円滑に進みました。ひとえに事務局役の小野宗一さん、佐藤武宣さん
のご尽力の賜物です。

約2時間はあっという間に終って外に出ると、今朝の様子とは打って違って4月らしい穏やかな陽気そのもの、名残を惜しむ出席者達は、三々五々散策に、或いは二次会へと向かって行きました。

尚、次回は2011年4月16日（土）如水会館・ジュピターで、と決まりました。

—— 以下は、今回出席者の一覧です（男女別アイウエオ順、敬称略）——

(女性 11名)

[illegible]

OB会便り

NM40同期会報告

沖 本 達 也

容易に想像頂けるとと思いますが、ニチメンに昭和40年入社の同期生の会です。同期という言葉には、兵学校の「同期の桜」の歌にあるが如き一種独特の響きがあります。それは「お互い競争意識を持った仲」との意味合いもありますが、同時に「お互い助け合った仲」との意味合いもあり、むしろ後者の思いの方がより強く蘇ります。昭和40年入社は下記の特珠な事情もありました。即ち、

——入社した年に首脳陣で内紛があり、あまり自慢できるものではない週刊誌（アサヒ芸能？）に記事が掲載された事。

——同時に、同年は赤字決算となり、この為、翌年（昭和41年）の新入社員採用は10人以下、翌々年はゼロであり、後輩が入社しない為、組織の末席に長く座らせられた年代であった事。

——京橋の新社屋へ新入社員として入社した一期生であり、また、御殿場に研修場が建設され、この研修場にて一週間泊まり込み研修を受けた一期生である事。

これらの前向きな要素と後ろ向きの要素が同時に起きた年でした。これらの要因が関係あるかどうかは不明ですが、同期の結束は結構固い年代であったと思っております。

同期会も断続的に行われておりましたが、1995年ごろから定期的に行うこととなり、今年の同期会も4月15日に筆者が幹事として赤坂で15名が参加して行いました。

この際の集合写真を紹介致します。出席者全員が相応に年代を重ねた顔で写っております。

この報告を第一回として各年次の同期会報告が連続して会報に掲載されることを希望しております。



前列、時計回りで

戸田、久本、水野、遠藤、浜地、青木、大平、平野、沖本、小松各氏

後列、時計回りで

藤澤、今村、池本、三木、佐渡各氏

アトランタの夜

北井 曉夫

海外に出ている時間のほうが長かったような記憶があります。タイでは、製品拡販のために、トラックに見本機を積んで、ラオスやカンボジア国境付近の農村まで巡回しました。持参の映写機とスクリーンで夜は映画大会、観客がたくさん集まったところで、耕運機やディーゼルエンジンのデモなどをします。仕事ではありますが、どこか冒険旅行のようなところもありました。

交遊抄

1971 感化された。

年、ニチメン 家業の電子部品商社を
(現双日)に 継ぐためにニチメンを退
同期で入社し 社した後も定期的に会合
と公本豊田君 主持で、2005年2月

「元アリスタライフサイ
 エンス米国法人」と目置
 光昭君（目精イー・エス
 ・ピー）機械米国法人
 人は、ともに商

夜

で3人で会ったのが
 恒例になった。

社マンとして夢を抱き若き日を謳歌した間柄だ。異国で活躍する親友との再会は海外出張の楽しみの一つである。

アトランタの夜

北井 曉夫

松本君と目置君は両者とも海外暮らしが通算20年以上で、家族の問題など何かと苦労も多いだろう。しかし、いくら酔っても2人からは「愚痴」や「不平不満」は聞かれない。

い、金曜日之夜、
置君とは妙にウ
終えんと志賀高原
尾根に直行。自宅
のは日曜深夜、そ
翌早朝から仕事に
球。何事も精力的
組み、バイタリテ
あふれる2人には

「ママが合
仕事をし
や八方に
に戻る。力
でも全力投
取りたい・おきお」新光商事

社長）

1月4日付日経新聞“交遊抄”より

1971年4月に入社し、1981年8月に退社するまで、ニチメンには10年5ヶ月間、お世話になりました。配属先は一般機械部エンジン農機第2課で、ヤンマーディーゼル製品を中心とした、農業機械やエンジンの輸出業務が主体です。一般機械部は当時のニチメン機械部門では最大規模の売上を誇っていました。入社3年目で、初の海外出張先が独立後間もない、バングラデシュのダッカ。こんなひどいところで働く人は気の毒だな、と思っておりましたら、なんとその2年後に駐在を命じられてしまいました。危険地手当、僻地手当がついて月給30万円(1千米ドル)。当時20代の若造には、十分すぎるお手当てでしたが、お金の使い道がありません。3ヶ月に一度バンコックに出張するたびに豪遊して英気を養いました。

滞在1年あまりで、流行性肝炎にかかり、息も絶え絶えに帰国、入院そして自宅療養。これでダッカとは縁が切れたと思っておりましたら、今度は長期出張者として赴任することとなりました。そのときに日航機ハイジャック事件が起こりました。1977年9月のことです。本社から日経新聞記者の手伝いをせよとの指示がありました。日経の記者のくせに英語が出来ず、通訳をする羽目となりました。ハイジャック事件に誘発されてクーデター勃発。宿泊中のホテル前で反乱軍と政府軍の銃撃戦が起こります。流れ弾に当たって死んだら、本当に犬死だと思い、ベッドの下に身を隠しました。バリバリバリ、という機関銃の音はいまでも忘れません。英語の出来ない日経の記者は、震えているわたくしを横目に、特ダネのチャンス到来とばかりにカメラ片手に駆け出していきました。記者の仕事にかける執念に圧倒されました。

帰国後も以前と同じ職場の営業マンとして、東南アジア諸国担当。パキスタン、タイ、ビルマ、セイロンなどなど、日本橋の本社にいるよりは、

70年代後半には、タイやフィリピンでヤンマー工場設立のためのフィージビリティ・スタディー（FS）が始まり、このプロジェクトチームに加わり、お手伝いをしました。3年後の見込み損益計算書や貸借対照表、資金繰り表など、先輩がサラサラと書き上げるのをかたわらで見ながら、いつかはこんな有能なビジネスマンになりたいと思ったものです。

新光商事に移ってすでに30年近く、社長業も17年目となりました。仕事の環境は大変厳しいものがありますが、平和な東京に住み、美味しい日本食を毎日いただく喜びを感じることができるのも、ニチメンでの経験があってこそです。

日経の若い記者から、交遊抄に書いて見ませんか、とのお誘いを受けて、即座に思い立ったのが、同期入社の松本豊和君(化学品部配属、ニューヨーク支店など勤務)と日置光昭君(わたくし同様一般機械部配属、シカゴ支店など勤務)の両君です。とにかくこの二人とはよく遊びました。いまでもよき友人としてお付き合いいただいているのは、ニチメンというすばらしい会社でともに過ごした、共通の思いがあるからでしょう。



左から北井、松本、日置

ビジネスインテリジェンス(高度経済・経営情報)とデジエル博士

中 川 十 郎



最近、元外務省の佐藤優氏や元NHKの手島龍一氏の著書のせいもあり、インテリジェンスなる言葉が目につくようになった。日本ではイン

テリジェンスは軍事や外交分野での「諜報」の暗い意味を連想することが多い。それに比べ「ビジネスインテリジェンス」なる言葉を知っている人はそんなに多くないだろう。本や資料によると日本に初めて「ビジネスインテリジェンス」を紹介したのは私だと記してあるものがあり、恐縮している。

ニチメン・ニューヨークに在勤中、月に1回、ジェトロ主催の米国経済研究会に出席していた関係で、ジェトロ・ニューヨーク駐在の土屋氏と面識が出来た。同氏は大学が私と同窓で、親しみを感じていた。ある日、同氏からNortheast Trade Reviewという貿易雑誌の記者のインタビューを受けて欲しいと要請があった。日本の商社は100年以上の歴史を持ち、100か所以上の海外ネットワークを通じ、2万点以上の商品を扱っている。年商も数兆円に上がる日本特有の企業だ。ニチメンはハイテク分野ではボストンで開発された人工知能Artificial Intelligenceの日本への紹介にもかかわっているなどと説明した。

この記事に目をとめたワシントン郊外にある英語―日本語のコンピュータ機械翻訳を開発中の会社からニューヨークでさらに詳しい話を聞きたいと電話があった。来社した開発担当部長のコーヘン氏を46丁目の日本レストランの寿司に招待した。21世紀はITやコンピュータなど知識情報産業が発展するので、日米企業とも、ICT(情報、通信技術)を中心とする情報産業分野に注力すべきだと思うと話した。すると、彼はやにわに、かばんからReal World Intelligenceなる本を取り出した。一瞥すると、競争情報やビジネスインテリジェンスに関して、きわめて系統的かつ理論的に

説明してあり、興味をそそられた。この本を翻訳し、情報分野で後れている日本にぜひ紹介したい。ワシントン在住の著者と交渉して欲しいと頼んだ。暫くして著者は日本語への翻訳を了承した。すでにイスラエルからもヘブライ語に翻訳の話が来ているとコーヘン氏から連絡があった。

ベストセラーの『華麗なる窓際族』など多くの著作もあるニチメンの2年先輩の元業務部・守誠さんに出版社の紹介を依頼した。暫くしてダイヤモンド社が出版に応じたと連絡があった。それから土日、休日を返上し、初めての翻訳が始まった。翻訳にはまず日本語の素養が必須であることを痛感し、日本語の辞書も熟読した。こなれた日本語への訳出に苦労した。1年をかけて翻訳と格闘した。かくして『CIA流戦略情報読本』が帰国後6ヵ月目の1990年9月に出版された。日本橋丸善の店頭高く積まれた本の表紙に中川十郎訳の言葉を見つけ感激のあまり、一気に10冊買い込んだ。こうしてビジネスインテリジェンスなる言葉が日本にお目見えすることになった。縁とは誠に不思議なものである。

著者の元米国国家情報評議会副議長のハーバート・マイヤー氏から1990年10月パリで開催される国際情報会議にスピーカとして招待する。日本総合商社の情報収集、活用について講演して欲しいと依頼が来た。パリ・インターコンチネンタルホテルでの講演で「情報は商品と違い、人に与えても減らない。逆に与えることにより相手からも情報が得られて、情報は増加する特性を有する」と話した。最前列に陣取っていた年配の参加者が「あなたのこの情報理論は斬新だ」。情報を教えているスエーデン・ルンド大学大学院であなたの「情報通増理論」を講義に使いたい。了承して欲しいと発言があった。さすが外国では他人の発想や理論を使用するときはこのように本人の了解をもとめることに感銘を受けた。いわゆる知的所有権を大切にしていることを身をもって実感した。

講演が終わり、名刺を交換したところ、この学者は1972年に世界で初めてビジネスインテリジェンスを世に紹介し、ビジネスインテリジェンス研究の世界的権威のステバン・デジエル博士で

あることが判明した。日本のNEC小林会長のC&C（コンピュータと通信）理論も高く評価しており、日本の情報事情にも詳しくあった。このご縁で、翌年91年4月にルンド大学大学院に講義に招かれた。講義後、博士にスウェーデン料理のレストランに招待され、その席上、大学へ移り、ビジネスインテリジェンスを本格的に研究したらどうかと勧められた。このときの誘いが私の大学教師への転向のきっかけの一つとなった。

1999年にルンド大学で行なわれたスウェーデン・デンマーク合同のビジネスインテリジェンス国際会議に講師として招待された。このとき博士のかつての教え子で、スウェーデンの伯爵の末裔に嫁いだ伯爵夫人が聴講にきており、デジエル博士に紹介された。そのご縁で広大な森の中にある伯爵の邸宅での夕食と初めての鹿狩りに招待された。これは私の一生の得がたい思い出となっている。これらのお返しの意味もあり、1992年2月12日に虎ノ門・全日空ホテルで開催した日本ビジネスインテリジェンス協会創立記念の国際情報シンポジウムにはデジエル博士をキーノート・スピーカーとしてスウェーデンから招待した。82歳とは思えぬ力強い素晴らしいオープニング講演をいただいた。

ジェトロの土屋氏には1989年にニューヨークで開催の全米競争情報専門家協会（SCIP）の会合に講師を依頼された。この会合に同じくスピーカとして参加していた米ラトガース大学の情報専門家ベン・ギラード博士と面識が出来た。そのご縁で2冊目の翻訳『グローバル企業の情報組織戦略』（ベン・ギラード博士著）をエルコ社から出版した。さらに、SCIPのワシントン、ボストン、シカゴ、モンリオール、シンシナチ、ニューオリンズ、サンディエゴ、オーランドなどの情報会議にも参加し、欧米の情報研究家との人脈を拡大した。

デジエル博士にはその後も、1990年のワシントン国際情報会議、92年のニューオリンズ競争情報会議、93年の上海・北京での中国競争情報協会設立準備国際会議、豪州競争情報会議、96年のパリ、ニース、フロリアノポリス情報会議、97年の香港国際会議、98年のチリ国立大学・国連主催ビジネスインテリジェンス会議、99年クロアチア・ザグレブ情報会議などにスピーカとして招待いただき、さらにビジネスインテリジェンス研究と交流を深めた。デジエル博士の紹介のご縁で中国では1993年以来、今日まで中国競争情報協会の国際顧問に

任命され、上海、北京の情報国際会議にしばしば講師として招かれている。この協会の副会長で上海図書館副館長のミャオ博士が昨年出版した著書で私のスピーチや論文から30以上引用して頂き、恐縮している。

デジエル博士とロンドンのテイラー・グラハム社から93年出版のIntelligent Corporation（知的情報企業）にも共著者として執筆させて頂いた。このようにデジエル博士は私の20年以上にわたるビジネスインテリジェンス研究の恩師で、そのご指導には感謝してもしきれないほどのご厚情を賜わった。

デジエル博士は2004年4月に94歳の長寿を全うされて他界された。心から感謝を申しあげ、はるかにご冥福を祈りたい。博士は死の直前までビジネスインテリジェンスの研究と講演を続けられ、悔いのない大往生を遂げられた。博士の郷里クロアチアの風光明媚な世界遺産ズブロニクの別荘に、私の家族ともども、一度招待したいといつも機会あるごとに言っておられたが、私のほうの都合で実現できなかったことが悔やまれる。

私は1993年に米国競争情報専門家協会（SCIP）から世界の情報専門家20名と共著でPerspective of Intelligence（インテリジェンスの展望）を出版。96年には競争情報専門家のベンギラード博士の『グローバル企業の情報組織戦略』をエルコ社から、2003年には日経BP社から米エール大学のウィリアム・ラップ博士の『成功企業のIT戦略』を共訳出版。ビジネスインテリジェンスの日本への紹介に努力を続けている。

1992年2月に日本に創設した日本ビジネスインテリジェンス協会の情報研究会はそのあとも一回もかかさず、定期的に2ヶ月に1回開催。2009年2月には創立18周年、100回を迎えた。この間の研究会参加者累計は6000人を突破。この人脈は私の一生の宝である。2009年2月には100回記念に協会有志と編著『知識情報戦略』を税務経理協会から出版した。これは20年に及ぶ私の恩師デジエル博士のご指導の賜物であり、ビジネスインテリジェンス研究の集大成である。最近「継続は力なり」という言葉をしみじみと実感している。

この研究会にはブラジル駐在中にご縁が出来、以来33年間、懇意にいただいている小野田寛郎元陸軍少尉、町枝夫人は、ニューヨークでのご

縁のドクター中松氏とともに創立当初からの名誉顧問として、18年間参加いただき、ご指導に預かっている。ニチメン先輩の久沢克己さん、守誠さん、村井靖武さん、長谷川洋さん、山邑陽一さんなども講師としても参加いただき感謝している。

前にも述べたが1991年4月にデジエル博士にルンド大学に講演に招待された。この講義を取材にきたスエーデンの新聞記者が「21世紀はGDP(国内総生産)ではなく、GBP(頭脳力総生産)が国家の競争力を生み出す」という私の言葉を引用し、キャタピラーの上の脳に大砲をつけた戦車の絵を載せ、「21世紀の知識情報時代のスエーデンには脳力、知力が大切だと日本から来た商社マンが講演した」と新聞1面に掲載した。

この記事を読んだスエーデンの王立国際問題研究所から講演の招請がフィンランド・ジェットロから舞い込んだ。この要請はたまたまニチメンからヘルシンキ・ジェットロに出向していた長谷川洋さん経由だと後で分かった。この講演は私の都合もあり、実現しなかった。20年後に、そのときの長谷川さんからこのニチメンOB誌への寄稿を要請されて、私の拙文がみなさまのお目に留まることになった。感謝に耐えない。縁とは誠に不思議なものだ。

さてこのように、20年近く独学で勉強してきたビジネスインテリジェンスだが、日本ではまだまだ認識が薄いのは残念である。米国では1986年にバージニアにCIA、NSAなど諜報関係者、学者、情報研究者、ビジネスマンなどを中心に競争情報専門家協会(SCIP)を結成。CIA、NSA、国防総省情報局などの敵国に対する情報収集の技法を民間に適用するコンペティティブインテリジェンス、いわゆる競争情報の研究を開始した。デジエル博士の言う「諜報の民営化」がはじまったのである。競争相手をターゲットにするアングロサクソン流の情報収集技法には私は批判的で、情報は主としてビジネス戦略策定に活用すべきであるとする日本ビジネスインテリジェンス協会や、スエーデン、フランス情報協会などのグループがある。これに対し、米国、英国、豪州、カナダ、イスラエル、中国などは競争相手の競争情報研究に注力している。

21世紀のグローバル競争時代を迎え、経済競争は激化しつつある。そのような環境下、世界規模で競争優位を保持するためには情報の収集、分析、活用法について、これまで以上の研究が望まれる。

情報の機密保持についても十分留意すべきである。情報競争の時代にもかかわらず、日本では情報に対する認識が甘く、簡単に情報を盗まれるケースも散見される。先端技術、知的財産についても周到な注意が肝要である。関係各位におかれては情報の価値と重要性を十分認識し、国際市場での商戦に勝ち抜いてもらいたいものである。

かかる観点から、東京経済大学では2004年、「ビジネスインテリジェンスとIT」特別講座を日本で初めて開講し、社会人、大学院生、学部学生200人が聴講。学生には4単位が付与された。日本大学大学院グローバルビジネス研究科では2007年から「情報と競争」の講座を2単位で開講。明治大学リバティ・アカデミーでは2008年から秋季の「ビジネスインテリジェンス入門」講座を始めている。一方、岐阜県、宮崎県自治大学校では県の管理職に「行政情報」などを数年間にわたり講義したことがある。東京都小金井市図書館でも「ビジネスインテリジェンス」関連講義を行っている。このように徐々にではあるが、ビジネスインテリジェンスへの関心が芽生えつつある。

「ビジネスインテリジェンス」とは「高度経済、経営情報」のことで、関連情報を収集、分析、評価し、日ごろのビジネス、研究、行政、生活などに活用する情報のことである。欧米に比し、日本の情報研究はまだまだ出遅れており、この機会に情報に対する関心を持っていただければ幸いです。21世紀は情報知識産業、地域的にはアジアの時代である。情報に対する鋭敏な感覚を磨き、情報を効果的に有効に活用するために努力して頂きたいと思います。まさに情報を制する者がビジネスを制し、世界を制する時代が到来している。

私の情報研究は20年前にふとしたきっかけでニューヨークで始まった。残りの人生をニチメンで学んだ貴重な経験を基に、「国際マーケティング・グローバルマーケティング」と「ビジネスインテリジェンス」研究の二本立てで一生勉強を続けたいと思う。

ニチメンでの皆様との出会いと素晴らしいご縁に感謝しつつ、「一生勉強、一生青春」(相田みつを)と「晩晴」(唐時代の李商隐のことば)を座右の銘として、悔いのない人生を送りたいものと日夜老骨に鞭打ちながら努力している今日、この頃である。

§ ニチメン親子三代見聞記 §

—今は亡き岩田昭二先輩、畏友池田宏兄に捧げる—

牧 洋 生

ニチメンに親子三代、父、私、娘が大変お世話になった。

今回、夫々の在任期間中の色々な出来事や見聞記を思い出しながらお話ししましょう。

すべては記憶に依るものなので、多少の不正確さはあると思うがご容赦を。

一代目・父秀之助

今年は、寅年。父は、明治35年五黄の寅年生まれで、福知山の出身。最終は、東京の大学から在学中に外交官高等試験に受かり外務省へ入省。処が入省数年後、祖父が亡くなり、父自身も官僚生活に嫌気がさし、同郷であり大学及び外務省の先輩でもあった芦田均（後の総理大臣）に相談結果、ニチメン（当時、日本綿花）を推薦され、当時の南郷三郎社長等トップの紹介受け、昭和2～3年ごろ日本綿花に途中入社した。

入社同期には、三宅孝雄氏（後の副社長）等がおられたと聞く。

“虎撃ち” —寅年まれが虎を撃った？—

父は、直ちに、日本綿花のインド支店に駐在となり福井慶三支店長（後の社長）の配下に入った。当時のインドは、英国の植民地ながら、地方は夫々の土候国から成り立ち、夫々の王様（マハラジャ）が統治していた。父は、綿花買付けなどでインドの各州を回っていたが、当時のマドラス州のマハラジャに非常に可愛がられ、この州でお前の好きな事を叶えて上げると云われ、それなら折角インド駐在になったので虎を撃ってみたい！と云った。それが叶えられ、早速、自分のエステートに案内され、始めは、練習もあり野生の鹿や猪などの小動物を撃っていたが、やがて熊や豹なども撃ち、最後は虎を仕留めたと言うもの。

“虎撃ち” —shooting— は、当時の英国では貴



族のスポーツの狩猟の中でも最高のスポーツである。そこには極めて厳しい規則があり、撃ち方にも決まりがある。銃の中に弾丸は2発しか与えられず、一発は命中用。あとの一発は止めの一発用となっていた。この2発で仕留め損なうと、手負いの虎が逆に襲ってくる危険性があるのと、皮に幾つも弾痕があると毛皮の商品価値も下がる。翌日、検視官が見て回り、2発以上撃っていたらshooting誌の記録に残さないと云う全く人間と虎との一対一の真剣勝負なのである。然も、虎は、非常に警戒心が強く、自分の歩き慣れた道しか滅多に歩かない為、虎撃ちは、その道を探り当て、樹の上に櫓を組んで真夜中に待ち伏せて撃つのである。後に日本軍がインパール作戦などでジャングルに入ると、虎が危険なので、鉄砲や機関銃を乱射して射殺したりしたが、斯かる射殺方法は当時の英国式shootingとはならない。加藤清正の朝鮮での虎退治は別として、英国の権威あるshooting誌の記録に残っているのは、日本人として父と徳川義数？公爵の二人だけの筈だ。ここでは大藪春彦流の‘4連発無反動オートマチック銃’使用などは、英国式shootingではない。この虎は、最高級の毛皮なめし屋で虎の皮の敷物にしたが、戦時中、疎開している中に盗まれて仕舞った。

父が、何故この様に、マハラジャに接近し虎撃ちまでしたかと言うと、当時、インドの綿花を始め穀物などの農産物は、マハラジャがその動静及び情報を一切握っており、マハラジャの情報なくしては、綿花の買付けとか相場張りは出来ない状態だったのだ。

この為、父は、福井支店長からも厚い信頼を受け、虎撃ちなどした次第。

二代目；洋生（ひろお）

インド出生とニチメン香港支店勤務；

私は、昭和9年、父がインド在任中、逆三角形した形のインドの南の先端にある当時のマドラス州チュチコリンと云う片田舎で生まれた。当時、父の部下に泥堂弘生と云う方がおられた時、私が

生まれたので、その名前の「ひろお」を貰って、インド洋で生まれたから「洋生」と名付けた云う事聞いた。昭和14年帰国。昭和33年本人の希望と父の縁故でニチメン入社。最初の2年間は「経理部」配属、その後「東京化工部」（後に、東京合成樹脂部と化学品部に分かれる）に転属になり清水督三部長（当時）の配下の課に配属。その後、小浦和夫先輩の後任として香港支店勤務となった。

飲茶とロクさん；

日本で、一般に「飲茶（やむちゃ）」は、街中の飲茶レストランで、店内に売りに来た売り子から点心を注文し、皆で賑やかに食べる朝や昼の食事と思っておられると思います。それはそれで間違い無いのですが、「飲茶」の本来の由来は、南中国である香港の地場の有力者が、街の中で自分の馴染みの飲茶レストランで、朝、自分の席を決めて“場を張って”食事することやその習慣を総称して云うのです。そこに、友人や地場の有力者が集まり、その人を中心に情報交換しながら食事をするのです。香港は、昔、文字も漢字の当て字しかなかったもので、この飲茶の習慣は、貴重な情報交換の場所でした。その時出すお茶、それが文字通り「飲茶」と言われるものであり、昔の中国の茶聖の名前を付けた高級飲茶レストラン「陸羽」（ロクイー）などもその一つです。お茶の序に茶菓を出す、それが「点心」と言われる蒸しエビや焼売や小籠包などで、お茶のおつまみとなったものです。当時は、有力な得意先の社長に会おうと思うと、その社長が場を張っている飲茶場所に朝行って会い、売込みの話をしたり、色々情報貰っていたものです。その有力者の会社に直接行っても大概は不在でした。その中であって、ニチメン香港支店の化工部現地部長の陸純氏（通称ロクさん）は、香港では他の各社からも化工関係の有力者と見做されており、昔から「大同飯店」と云う今は無くなったレストランに場を張っていました。彼は、化工関係の業界知識だけでなく、一際優れた食通でもあり、海外からの有力者が来ると、ニチメンのみならず、他の日本商社や銀行、メーカー辺りからもロクさんに何処へ案内し、どんなメニューを設（あつら）えたら良いか聞いて来る存在でした。これは、ニチメンと同時に、我が化工部にとり大いなる宝であり、誇りでした。今でも80何歳で元気だそうです。

香港中華料理店「福臨門」など；

そのロクさんの行きつけの料理店は幾つもありますが、「福臨門」（ふくりんもん）は、その最たる中華料理屋でしょう！今から10年位前に、香港

から最高級の中華料理店として銀座、丸の内に進出しましたが、料理と共に、料金も目が飛び出る程の高級中華料理店です。実は、私共が、香港にいる時、ロクさんに連れられ香港の「福臨門」に日原東洋君と時々料理を食べに行っていました。当時は、日本人には殆ど知られていない小さな高級料理店だったのですが、ロクさんのお陰で値段もそこそこでした。そこに東京本社会樹部より成見和男課長（当時）が旭ダウの堀深社長等や日本ゼオンの大西専務（当時）などお偉方を連れて出張で来ると、良く此処にご案内したものです。お店の一番のお薦め料理は、矢張りフカヒレスープに蒸しアワビですが、フカヒレと云っても福臨門の最高級のフカヒレは、現在日本で人口に膾炙されている‘姿煮’や‘仏跳檣’（ファッテウチョン）ではなく、フカヒレが、薄味のスープに整列して沢山浮かんでいると云うものです。これは、非常に上品な味で、矢張り「福臨門」でしか食べられない最高級品だと思います。仏跳檣は、瀬戸物の壺の中で、姿煮のフカヒレや椎茸やらが混ざってコトコト煮てあり、仏様が食べたら余りにも美味しくて檣（ぼしら）に跳びあがったと云う謂れで名付けられたものです。然し、この姿煮とか仏跳檣は、元来は、福州/潮州料理であり、香港の正統的なフカヒレとは違う為、広東人であるロクさんは、フカヒレの場合、姿煮やら仏跳檣は余り薦めませんでした。「蒸しアワビ」は、何と最高品は日本からの乾燥アワビを柔らかく戻したもので、縁は薄黄色で、中はサーモンピンク色。見ても美しく又、食べるとトロウとした柔らかい歯触りで、それはそれは美味しいものでした。一つのアワビから一切れ位しか美味しい処は取れないそうです。古代から、乾燥したフカヒレ、乾燥アワビ、それに乾燥椎茸（どんこ）は、日本から中国への貢物であり、中国人から見ると‘これは日本から来た貴重な舶来品よ！’と云う感覚です。

これに匹敵するのは、東京会館のアワビステーキだと思います。お値段も超高級ですが、・・・何れにせよ、当時、中国料理の中でも、広東料理が世界でも一番美味しい中華料理であり、これを食べるチャンスあった事は幸運でした。当時、香港支店化工部は、地場商いで結構利益も上げており、内地からのお客があった時など、多少の接待費は大目に見られていました。香港では、当時、広東料理は広東料理屋、北京料理は北京料理屋、上海料理は上海料理屋でしか食べられず、日本からのお客様が、広東料理のフカヒレや石斑魚の蒸物に北京ダック、上海蟹を一軒の料理屋で食べたいなどと言われると全く不可能であり、往生扱（こ）いたものです。

マレーシア Dr.マハティール首相

昭和50年にマレーシア クアラルンプールに池田宏支店長の下、次長として同時赴任しました。当時、ニチメンの東西化工部は、マレーシアにScientex社（ゼオンとの合弁で、ビニールシート製造）、MECI社（日本ゼオンとの合弁で塩ビ樹脂製造）、フランスベッド社（単独進出で家具及び家具素材製造）、マレーシア積水（マ上院議員ダト・ラジャ・ノンチック氏と積水化学との合弁で塩ビパイプ製造）など4合弁会社を持ち、化工部としては重要な拠点でした。



左から5人目筆者の右手にマハティール首相、左手に故池田宏さん

当時、マレーシアは、フセイン首相からDr.マハティールに首相が変わり、マレー人優先主義の「ブミプトラ」と日本に見習え！と云う「ルックイースト」政策を掲げ、強力に国造りを進めていました。その頃、マレーシアのプロジェクトを獲得するにはマ首相と直接接する必要がありました。然し、マ首相は、気難しいとの風評あり、中々接触機会が掴めません。その中であって、池田支店長は、マ首相と特別なコネを持つ川鉄商事の久米支店長と親しくなり、その関係からマ首相と接触することが出来ました。これは、その後のビンツル肥料プラントに繋がる発端となり、この功績は大と思います。処が間もなく、池田支店長は帰国となり（その後東京プラントの部長）マ首相との接触手段が無くなり、どうしたものかと随分悩みました。別途、電話線入札事業などで、マ政府とは関係ありましたが、プロジェクト獲得推進には、矢張りマ首相との接触が不可欠でした。その時、東京機械部出身の村田茂廣君が居ましたが、彼は、穏やかな人格で、それはマレー人に非常に好かれる性格でした。そこで、彼と共にワーク結果、マ首相の全ての秘書と極めて親しく接触出来る様になったのです。それからは、マ首相とアポイントはニチメンで直接取れる様になりました。当に「将を射んとすれば馬を射よ！」でした。このことから、マ首相とは、一か月に一度位は会うこと出来る様になり、その情報から、その当時で440億円と云う巨額のビンツルの肥料プラント（神戸製鋼）の成約を皮切りに、三井造船のガスパイプラインプ

ラント、ジョホール州の住宅プラント（安藤建設初の海外進出事業）など片端からプラント類を獲得して行きました。

因みに、マ首相は、2004年6月来日時、それまでの自国及びアジア諸国への貢献や対日関係緊密化などの寄与で慶応義塾大学より名誉博士の称号を授与された。

此処で面白い話を一つ。ニチメンが、マ首相と始終接触していたので、マ首相の食べ物の好みも知っていました。他の商社からマ首相へのお土産を何にしたら良いか聞いて来たので教えたら、ある時マ首相より、「牧さん！日本の会社の人には何か変なこと云わなかったか？何しろ、日本から来る訪問者が、皆、メロンと柿の種を持ってくるヨ！」と笑われ非常に恐縮したことを覚えています。

三代目；娘恵子

娘の恵子は、私の香港駐在中、香港で生まれ、マレーシア・東京育ち。それまで親子二代がニチメンにお世話になった影響か、恵子もニチメンを志願し、平成4年ニチメン東京に入社し食料部穀物課に配属。商売上、食糧庁通いの毎日。入社当時の上司は、佐渡部長、吉川課長。何故か4年後の平成8年に退社し、法律事務所、三菱総研など勤務した後結婚し、今は一児の母親となり毎日忙しく子供の世話に明け暮れています。

以上が、親子三代に亘りニチメンにお世話になり、その時の見聞録を書いたのだが、娘はいざ知らず、親子二代に亘って共通するのは、商売上、その時々的確な情報の獲得と活用と云う事である。

更に、父の赴任地が当時の英国の植民地であるインド、小生は、香港、マレーシアであり、娘は香港生まれと云う事で、通底することは全て嘗ての英国の植民地だったと云う事である。

父は、生前「英国は、憎らしい処と尊敬出来る処と両方ある！」と何時も云ってたが、私もそう信じる。

残念ながら、今はニチメンと云う名前はなくなって仕舞ったが、親子三代の長年に亘りお世話になった感謝は忘れないし、愛着も一入だ。小生は、現在は馬齢を重ね何とか後期高齢者に入ったが、「三火会」と云うニチメンの旧部課を超えた毎月の定期ゴルフ会（ご興味ある方は申し込んで下さい）、旧東京合成樹脂部の集まりである「砂場の会」、ニチメン慶応会などニチメンの関係の諸幹事をしており、その他、ニチメンとは関係ない諸幹事をやっていて毎日を結構忙しく、又、楽しい日々を送っている。（了）

Menkwa Gesellschaft, (メンカ ゲゼルシャフト)、Bremen

—日本綿花からニチメンへの歴史の中の欧州—

斎 藤 勝 義



1870年代の不平等条約時代、ニチメンの前身である“日本綿花”が、如何様な時代背景に1892年誕生したか、第二次大戦中はどのような社会的使命を担ったか、そして欧州では戦後どの様に総合商社として活動したかを調べて見ました。

英国大学（マーク・メイソン）が行った総合商社分析の中のニチメンは

1921年 日本綿花は 欧州に欧米商館の取引介入を排して直接取引の為、ブレーメンに欧州本社を設置 欧州各国に支店を開いた。

1982年 ニチメンと称する迄には 木材取引で日本業界1位に成り繊維から機械事業に大きく転換した。然しながら 資本の充実 人材育成不足により 次の10年に於いては 新技術や製造業を抑える企業発展が鈍った。と述べています。

安政の通商・領事裁判権の不平等時代から1902年の日英同盟に至る迄、日本の米穀・生糸等の貿易はWalsh, Hall, B.B. Watson等の外商コンセッションエーの手中にあり、1892年 日本綿花がこの外商の介入を避け、自らの取引を目指して設立され、1894年にはインド・エジプト棉の取引を開始。1921年3月にブレーメンに設立のメンカ ゲゼルシャフトを足場に、上海と欧州との間の果敢な3国間繊維原料取引を始め、そのロンドン支店も開かれた。日露戦争、一次世界大戦、日本綿花は 欧州—豪州のウール取引をジャワ経由で行い、綿花、綿布、麻取引へと拡大していった。

大東亜戦争に入ると、帝国政府の要請で繊維から食品、化学品を製造する工場経営をアジア地区（インド他）を任され、これが総合商社化への基盤と成った。欧州に於けるメンカ ゲゼルシャフト

は2次大戦・戦況を受けて終戦迄の2年は苦難の道であったが、ハンブルクのグローセ・ブライヒェン欧州本店ビルは戦火をくぐり辛くも生き延びた。戦後の艱難辛苦の中に於いて、日綿実業と改称し3年経過した1949年にはエジプト綿を日本が買い、アルミインゴット、銅板、タイル、陶器をエジプトに売る大型取引を成立させ、此処に日本綿花とメンカ ゲゼルシャフトの永い経験・力に日本の繊維業界（日清紡績元常務、妙泉信正氏談）が注目しました。1960年代に入ると、復興した欧州はインフラの整備、都市近代化が進み、建設機械、エンジン、自動車の需要が旺盛に成り、同時に日英関係も王・皇室の相互訪問を通じ改善され、両国の取引額は急増して、ニチメン欧州店の事業採算も改善されました。ニチメン欧州各店は小松建設機械、ヤンマーエンジンを繊維製品に替わり、取り扱う様に成った転機の時代です。

エンジン担当として私は 1969年英国に赴任し、1971年にドイツニチメンに転勤しました。当時の欧州総支配人は岸田博さんで、総本社のハンブルクに居られました。

美しいアルスター湖の辺のドイツニチメンは正に メンカ ゲゼルシャフトの栄光を継ぎ、自社ビルを一等地グローセ・ブライヒェンに構えておりました。このビルは今では100億円に近い資産と思われますが、70年後半 ドイツニチメンの繊維と化学品部門の損失の為、僅か2億円弱で売却したと記憶します。その翌年は元田中義巳社長がドイツ社長として再建の為赴任され、機械・鉄鋼





関係の業績が大幅改善され空前の利益を出しました。従いハンプルクの建物売却は真に残念で、未だに脳裏を離れません。

当時フランス・ニチメンを訪れますと、アベニュー・オッシュ 38 番地に堂々たる自社事務所を構えて居て、取引先をパリに案内するつど、ニチメンは金がある、素晴らしい事務所だと言われました。当時の河西良治フランス・ニチメン社長が購入されたと記憶します。メンカ ゲゼルシャフト滅び、パリ店は栄える…。正に繊維から機械への事業転換の時代でした。ニチメンが日商岩井と双日を結成した年、ニチメンから当社秘書に電話があり、古い家具を処分予定で、我方で引取るかの問合わせがありました。直感的にメンカ ゲゼルシャフトの総支配人室の家具と思い、有り難く引き取らせて頂き、今は100年の歴史を超えて生き延びた栄光のビトウリーヌ・応接セット・他家具を我社でお預りして居ます。

以上

資料 オックスフォード大学 ; 欧州各国のアジア戦略と日本の挑戦、1997
国連大学 ; 総合商社、1990

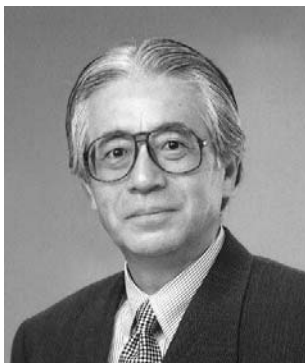
筆者 1961年 (S36) 日綿実業大阪本社 輸出綿糸布部入社
1964年 東京支社 社長室に転勤
1967年 東京支社 一般機械部に
1969年 ロンドン支店へ
1971年 ドイツニチメンへ
1989年 ニチメン東京本社 業務本部へ
1991年 ニチメン退社、DynaKS GmbH Duesseldorf創業し今日に至る；

事業内容；

エンジン・トランスミッション、代替エネルギーとCogene コンサルタント

自動車安全システム (Airbag Seatbelt STW) 企業のM&A

(顧客; Tuff Torq, ヤンマーグループ、三菱総合研究所、オートリーブ、日本政府 他)



日本酒を飲みましょう

京 野 勉

◆ 4月1日、ニチメン東京海外建設課に勤務していた時の同僚で、同期の社友

会の世話人高木亨一さんからメールを頂きました。「社友会の世話人として、会報発行の片棒担がされております。社友会の会報8号に投稿願いたい。タイトルは“日本酒飲んで下さい”的なもので、36年に日綿実業に入社・・・を経て退社、実家の仕事を継いだ。日本酒の伸びが今一で苦しい。7月の総会及び懇親会に自慢の菰被りを提供申し上げるので美酒爛漫を御最員に願う。懇親会の件は後にして、御社の宣伝になるような文面で、A4 2枚で写真も入れて収まるように頼む。10日まで添付フォーマットに打ち込んで下さい。」

◆ 1977年、ニチメン東京勤務時に現在の会社に転職したので、社友会とは縁がなく、存在も知りませんでした。エープリルフールの日に冗談が好きな高木さんのご依頼なので、ちょっと不安ですが、ご好意に従って、会社のPRをさせていただきます。転職した会社は“美酒爛漫醸造元”秋田銘醸株式会社です。祖父が創立者の一人で3代目社長、父は5代目社長という縁で入社しました。我社は1922年創立で、今年創立88周年です。週刊朝日も創刊88周年という縁で、取材を受けて、今年3月5日発行の88周年増大号（表紙は巨人の原監督）の特集記事に載せていただきました。

◆ 美酒爛漫の売上は1980年が最高で、85億円でした。以降、日本酒の需要は長期的に減少が続いています。父の後を継いで、社長になった1993年にはまだ74億円ありましたが、現在の売上は30億円です。社長になってからの実績は、売上減少に従って、会社の規模を小さくして、何とか縮小均衡を保っていることだけです。バランスシートの数字が、損益計算書より多い会社です。詳しい会社情報は、ホームページ（<http://www.ranman.co.jp>）をご覧ください。

◆ 美酒爛漫をお飲みいただく皆様には「美酒倶楽部」にご入会いただいて、年に4回、蔵元情報

を季刊誌で、お届けしています。現在会員数は、ようやく5,000人を越えました。10,000人を目標に募集活動を続けています。これをご縁にニチメン社友会の皆様に、ご入会賜りたくご案内申し上げます。美酒爛漫ホームページから簡単にご登録いただけます。会費など一切必要ありません。

3月～6月は“新規会員登録キャンペーン”中です。美酒倶楽部会員に登録されて、商品をご購入いただくと、「おまけ（本醸造カップ2本）」をプレゼントいたします。

会員登録はこちらから

http://www.ranman.co.jp/ranman/club/ranman_user/form.php

フリーダイヤル 0120-73-5544 でもお申し込み可能です。

◆ 日綿実業さんとのご縁は、1961年4月、中之島の日綿本社で綿糸布部輸出受渡課に配属された時から始まりました。課長さんは、青木さんで白いカバーの付いた椅子に座って、女性秘書が付いていました。

通関書類にグリーンのインクでサインをするのがユニークで、良き時代の日本綿花を偲ばせる洒落た雰囲気の方でした。船舶課の田中さんも記憶に残る人です。確か課長代理だったと思います。通関が終わって、ハッチを閉めた船に、日綿の荷物を積みせる為に船会社に掛け合っ、ハッチを開けさせて積み込んだという伝説の持ち主でした。日綿の積荷が多い所為だったと思いますが、それ位の事をやりそうな頼もしい感じの人でした。

◆ 受渡課は忙しくて残業が多いので、息抜きに昼間はサボって連日喫茶店に行きました。

若くて食欲旺盛でしたが、いつも資金不足だったので、ツケが効く梅田新道に近いおでん屋「マルミ」には良く行きました。その頃、大阪では、刷毛で醤油を付けてくれる屋台寿司屋の店が多く、現在のファストフード店のように手ごろな値段なので、懐に余裕のある時は良く通いました。色気も盛んな時期だったので、大阪名物の全ストを見るために十三の木川劇場にも出かけました。

いつも満員で、熱中した人が身を乗り出して2階から落ちたという話も嘘とは思えない熱狂振りでした。その頃、同じ独身寮に居た仲間で、今も年賀状を交換しているのは、佐世保出身の富場勝利さん、高知出身の高橋修造さんと丹波出身の村上久二さんです。

- ◆その後、船場分室の合成繊維の輸出課に配属された時に、仕事を教えていただいたのが、織物の輸出業務に詳しい佐野啓二さんです。美男俳優二人分の名前を持った先輩は、最初は愛想のない、口の悪い人でしたが、仕事を通じて気心が知れると親しくなりました。それ以来現在まで、付き合いが続いている得がたい先輩です。もう一人直接の付き合いはありませんが、経営

に関する貴重な示唆を受けた人は、当時社長だった神林さんです。「計数管理の徹底」「費用対効果のガイドライン」は、分かりやすい経営手法で、私も実務に利用させてもらっています。

- ◆日商岩井と合併して両社の名前が消えて双日(株)になりました。思い出深い「ニチメン」がこの世から消えたと思っていましたが、高木さんからのご連絡で、社友会が「ニチメン」の名を残して存在している事を知りました。社友会事務局の皆様のご尽力に感謝を申し上げます。高木さんの指示に従いまして、社友会へ入会申請申し上げます。

美酒爛漫醸造元 秋田銘醸株式会社 社長

美酒爛漫

普通酒らんまんカップ 200ml 標準小売価格 200円(税込) / 美酒パック 1.8L 標準小売価格 1,613円(税込)

おかげさまで美酒爛漫は、「全国新酒鑑評会」において前年に続き2年連続金賞を受賞しました。

お問合せ ☎ 0120-73-5544 美酒爛漫 オンラインショッピングもご利用いただけます。

秋田銘醸株式会社

お酒は二十歳に達してから

フレディの遺言

—私がボケた時のお願い—

高 木 亨 一



私は昭和13年12月生まれの五黄の寅です。

70歳の太台も昨年通過、71歳と今や立派に高齢者の仲間に入りました。後期高齢者になるのも時間の問題。

長年住み慣れた、鎌倉を引き払い、隣町の逗子に越したのは、6年前、65のときでした。

碧い海に、みどり豊かな平和都市、「逗子」、人口約6万人、ご多聞に洩れず、少子化、高齢化の問題を抱える都市ワースト5に入るらしい、そうとは知らず65歳の面下げて転入した。逗子市には申し訳ない事をした。

此方の僻みなのか、京急バスの車内放送では『高齢者の交通事故が増えています』とまるで、高齢者は車、自転車、歩きを問わず、交通の妨げである、家にじっとして居れと云わんばかり。そう云えば、昨年免許更新の為、高齢者講習を受けた。大船の自動車学校に同年輩と思しき男女20数名が集められ、若い講師より、高齢者の運転はいかに危険と隣り合わせているかを、種々機械を使って、試験をされ殆どの受験者は自分の、動体視力の衰えに。自信喪失に陥る。75歳以上の方には、更新時認知機能検査が義務づけられるとし、参考までに挑戦、全員認知症と認定された。

最近特に、忘れ物、探し物、等、一日の殆どの時間を使っているような気がする、外出の時も、一回で、バス停にたどり着けた、ためしもなく、携帯を忘れた、何を忘れた、何度。途中から家に戻り出直すこと、数え切れず。但し、行き先を失念した事はまだない・探しものに至っては、自分に腹が立って困る、左手の持っているのに気が付かず、探しまわる、または、ある目的を持ってはじめた事が、気がついたら、別の事をやっている、更に、当初の目的が何であったか、どうしても思い出せない。

誰だってボケたくない、そこで挙って、テレビ、新聞、雑誌がこれぞボケ防止の極意とばかりにかき立てるため、テレビの視聴者は毎日新しい情報が出てくることに戸惑いを感じている。

知人に、歩け歩けのカニ族に属したが、満足できず、独りで極端な距離に挑戦、何れは東海道五十三次を歩くことを夢見ていた。最近連絡ないので、聞いてみたら、徘徊老人と相成り、たびたび警察のお世話になっていると、。健脚があだとなった；

東京駅八重洲口の雀荘で、月一のペースで麻雀をやる事になっている。平日の昼間だが雀荘は8割方埋まっており童心に帰った、高齢者たちで活気にあふれている中に、必ずと云えるほど、静かなテーブルがある。メンバーの一人が忘れてしまい、今から来るのを、ただひたすら待っているらしい。昨年、我々のメンバーの一人がやはりあらわれず、携帯にトライしたが、留守電に、自宅は幾らなんでも出てしまったはず。だが他にすべがなく、電話したところ、奥方が出て、「主人はただ今入浴中」、掛け直せとのこと、本人の名誉の為名前は伏せるが、結論は約一時間遅れで始まり、彼が大負けした事は内緒にしておきましょう。これを機に麻雀から手を引き囲碁に専念してると聞いている。

趣味とボケ防止の為、将棋道場に通い始めて5年になる、大船にあるいわゆる将棋倶楽部で高齢／高段者が多くそれなりに格式の高いクラブと言える。通い始めて、3カ月で初段になりその後何度も2段昇進の機会があったが失敗未だに初段のまま、誰も感想戦をやっている事がある日、気が付いた。

80過ぎの3段の方と対局中、感想戦は禁止されているのか尋ねたところ、感想戦を、やりたいのは山々なれど、年齢とともに記憶力に問題あり、正確に元の盤面に戻せない。いつの間にか感想戦をやらなくなった。ボケてる証明です、と

医学博士湘南長寿園病院院長フレディ松川は長

ローマのRelation

浜 地 道 雄



Vespa（スクータ）で
女の子と二人乗りでスイ
スイ走る。

この憧れの風景は云わ
ずと知れた映画「ローマの休日」、恰好の「生きた
英語」の教材だ。

グレゴリー・ペックが扮するアメリカの新聞記
者Joe Bradleyは標準のアメリカ英語で話し、オー
ドリー・ヘップバーンが扮する某欧州国のAnn王
女はブリティッシュ系の優雅な英語を話す。

各国表敬訪問中、形式行事が続き、とうとうAnn
は最後の滞在地ローマでそっと宿舎を抜け出す。
直前にうたれた鎮痛剤のせいで道のベンチでウト
ウトして、そこを通りかかったJoeに介抱される。

いきいきとするAnnは望みだった美容院で髪を
短くして、スペイン広場でジェラートを食べ、
Vespaで二人乗り、「真実の口Bocca della Verita」
を訪れー、二人の距離が次第に近づいていくの
は、何度見てもドキドキする。その間、Rocca'sと
いうカフェのテラス席で、40年も続けてるとい
うAnnの父親の職業（＝王様）をJoeが尋ねる。

Joe: What does he do?

その答えがなんと「パブリック・リレーション
ズ」である。

Ann: Well..mostly you might call it.. public
relations.

その当意即妙ぶりには感心させられる。

PRと略記されるPublic Relationsは今やビジネ
スの重要な戦略である。

ものの本によると、1802年第三代アメリカ大統
領トーマス・ジェファースンが、議会教書の中で
使い注目される用語とのことで、アメリカ生まれ
のこの概念は時には世界情勢をも動かすほどに重
要性を増してきた。

ただ、日本ではメディアに広告はAdvertisement。
そこからPA Public Affairs、Public Interest（公
益）と観点を広げ、広報つまりPublic Relationsと
なる。

PRSA〈米国PR協会〉ではこう定義している。
「パブリックリレーションズは、各種団体、機関の
相互理解の貢献することによって多元的社会が意

思決定を行い、より効果的に機能することに貢献
するものである」

働きかけてタダでやる広告、プロモーション、
プロパガンダと思われて、広告と混同されるなど
やや誤用されてる感もあり、整理が必要だ。

元々ローマ・カトリックの普及用語だった
Propagandaはナチス宣伝に使われて価値を低め
たし、全体主義・社会主義の国ではスポーツ大会
などでの国威発揚に使われる。

何であれこの人間社会で重要なのはRelation＝
関係。普通に「関連」という時は単数だが、「双方
の関係」といった場合はRelationsと複数扱いにな
る。

株式上場の場合は投資家相手にインベスター・
リレーションズ（IR）、コミュニティとの関わりは
コミュニティ・リレーションズ、政府への規制緩
和等の働きかけはガバメント・リレーションズ。

コンピュータ用語にもRDBMS (Relational Data-
Base Management System), CRM (Customer
Relation Management)がある。

Task-Orientedな国際パートナーには「日本は
Relationship-Oriented Societyであり Human Re-
lationsがだいじ」と説明するのがよい。

王女としての最後の謁見でのAnnのことは、
I have faith in relations between people. もう会
えない二人の関係。つらく、せつないー。

（社）日本在外企業協会 「グローバル経営」より
転載・加筆



書評

『親鸞』 五木 寛之 著 (講談社)

渋谷 義

親鸞の幼少期の忠範（ただのり）は、五人兄弟の長男であり、父の日野有範は朝廷の下級役人であった。父は突然出家し母は病死したので、兄弟は伯父や縁者に引き取られた。清盛平家と後白河法皇の葛藤もあったが、やがて源氏の世に移る時代であった。

日野家には放埒（ほうらつ）の血が流れていると、使用人から教えられた。祖父が放埒の人と烙印された。異様な刃傷沙汰があったためだった。

世の中で非道な極悪人を「十悪五逆（じゅうあくごぎゃく）の人」と呼んだ。そんな悪人さえも、ひとたび弥陀（みだ）の名を呼べば救われるという今様歌を耳にして、上手に唄う忠範であった。そんな悪人どもに囲まれて生きていた忠範であった。

忠範は縁あって12歳で比叡山延暦寺に入山した。名も範宴（はんねん）と改めた。その後恩師慈円から東山大谷の吉水で人々に念仏を説いている絶大な人気の法然房（ほうねんぼう）に師事するように勧められた。範宴は断食などの厳しい念仏行に励んだ。名も綽空（しゃくくう）と改めた。

綽空は長年想いを寄せていた恵心（えしん）と結ばれ、妻として迎えた。その前に、恵心の妹鹿野（かの）からも熱愛された。鹿野は乱れ、綽空も煩惱に悩まされ、心を痛めた。

（法然上人（ほうねんしょうにん）から選択（せんちゃく）本願念仏集の巻物を預けられ緊張した綽空であった。やがて念仏集の書写も許され、不眠不休で書写に励んだ。名も善信（ぜんしん）と改めた。

過激な念仏聖（ひじり）たちの仕業騒動で、法勝寺などの放火もあり、世情は不穏になった。処刑された聖もいた。念仏が停止された。真の念仏とは、法然上人が選択された念仏で釈尊の心であり、無碍（むげ）の光である。処刑場の河原で念

仏の大合唱が都の空を圧した。

綽空（善信）も流罪になり、妻の恵心の故郷である越後へ向かうことになった。法然上人に別れを告げた時に、自ら「親鸞」と四度目の改名を告げた。遠く越後の人々に選択本願念仏集の心を伝えることを誓った親鸞であった。

以上が、ストーリーの概略であるが、内容は若き親鸞と周囲の人々をめぐる、波瀾万丈でドラマチックな展開になっており、ハラハラさせられた。

ところで、翻って現在の世をどう見るか、考えるか？ 物は豊かになっている日本、世界であるが、末法の世とは言わないまでも、宗教、民族の対立・紛争や人心の荒廃が憂慮される！！

浄土真宗の開祖として今も信仰の対象になっている親鸞の若き日の姿を描き、深く大きな題材を取りあげており、現代への問題提起をしていると思えた。



書評

『日本辺境論』 内田 樹^{たつる} 著(新潮新書)

渋谷 義

帯封に「日本人とは何ものか? 鍵は辺境にある!・・・」とある。著者は1950年生まれ。神戸女学院大学文学部教授。専門は、仏現代思想、映画論、武道論。252頁の新書版であるが、少々難解で読み応えがあった。要点と印象に残ったことをまとめてみたい。

日本人が集団で何かを決定するとき、その決定にもっとも強く関与するのは、提案の論理性でも、基礎づけの明証性でもなく、その場の『空気』であると看破したのは山本七平であった。戦艦大和の沖縄出撃が軍事上無意味であることは、決定を下した当の軍人たちでさえ熟知していた。しかし、それが「議論の対象にならぬ空気の決定」となると、誰も反論できなかった。東京裁判でも、日独伊三国軍事同盟についての賛否の態度を問われて、木戸幸一元内大臣も東郷茂徳元外相も「私個人としては、この同盟に反対であったが、すべて物事のなり行きがあります。」と言いつけている。

「付和雷同」体質が集団の合意形成であった事例が、日本の歴史上に何度もあったと著者は指摘している。敗戦後、「私は開戦方針を主導した」と名乗る人間が大日本帝国の指導部に誰もいない。「状況を変動させる主体的な働きかけは常に外から到来し、私たちは常にその受動者である」とする自己認識の仕方そのものうちにあるからという。「辺境日本」の伝統であると著者は結論している。一方、同盟国ドイツのヒトラーは「戦争遂行には、正義など問題でなく、要は勝利である」と宣言し、小気味よいニヒリズムを発揮した。

辺境は、中華の対(つい)概念である。辺境は華夷(かい)秩序のコスモロジー(宇宙論)の中に置いて初めて意味を持つ概念である。1800年前に、邪馬台国の女王卑弥呼は、中華皇帝から「東夷」として認知された。列島の政治意識は辺境民としての自意識から出発したと著者は位置づけしている。

「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致

す」という有名な聖徳太子の隋への親書は、その非礼に隋を怒らしたが、これは今日に至る伝統的な日本の高度な外交戦略であったと著者は解説している。ルールを知らないふりをして、実を取る面従腹背の辺境日本の戦略である。憲法9条と自衛隊の矛盾でも、日本人が採用した「思考停止」はその狡知である。非核3原則も非武装中立論も矛盾を糊塗した政治的狡知である。

日本人の知的傾向に丸山真男は「きよろきよろ」という擬態語を当てた。これ以上ふさわしい形容はない。日本人は適否の判断を一時的に留保して、愚鈍になれる。そして外来の知見に無防備に身を広げられる。これは、列島人の祖先が歴史的経験から習得したことである。

辺境人の宗教性は独特のしかたで構造化される。異教徒を許容する寛容さが日本人にはある。宗教間の深刻な紛争解決のために、海外に広めたい寛容さと私は思う。反面、辺境的宗教の難点は、霊的な未成熟さを中心からの空間的隔絶で説明できてしまうことである。そう言えば、我が国の仏教の教えで「いい加減という言葉」があるが、仏教の寛容さを象徴して、良い意味であると私は了解している。

日本の辺境性をかたちづくっているのは日本語という言語そのものである。日本語には無数の人称代名詞がある。この代名詞の選択で書き手と読み手の関係が設定されるなど、外国語にはない特徴があり、日本人には血肉化している。又、漢字と仮名が渾然一体となったハイブリッド語と言える。豊饒化された言語である。

以上、本書の要点を私なりにまとめてみたが、辺境人としての日本人を堂々と誇れるのか、それとも多少の恥ずかしさ、面映ゆさを覚えるのか? 読了して微妙な感慨が残った。キョロキョロ目の鳩山首相も辺境人のリーダーとして、日本のために頑張ってもらいたい。

岩田昭二さんのご逝去を悼む

林 喜久雄



昭和35年4月、私は大学を卒業して22歳で日綿実業に入社、大阪機械部・輸出機械課に配属された。当時の直属の上司がインドネシア駐在から帰国されたばかりの岩田さんであった。

帰国早々ラグビーの試合で肩甲骨を折って、入院されていて、出社されたのが1ヶ月ほど後のことである。それから実に50年余、公私にわたる長い長いお付き合いの始まりであった。親兄弟は別にして、これほど長く親密なお付き合いをさせていただいたのは岩田さんをおいて他にない。

仕事の面でも、私生活の面でもいろんなことを教えていただいた。少し大袈裟に言えば、現在にいたる私の人生に大きな影響を与えたという点では、両親にも匹敵する存在であった。

仕事の面ではインドネシア関連が中心で、例えば当時のスカルノ大統領やスハルト大統領などの政府首脳と日本側VIPとの会談のインドネシア語通訳、ハルタルト工業大臣とメーカートップとの会談における英語の通訳などの仕事も「出来るのが当たり前」という姿勢で「林君、君やれ」と気楽に指示されたものだ。ご自身もまた如何なる新しい未経験の職種であれ、立ちすくむとか、気後れするということは一度もなかったと断言できる。ニチメン在任中は勿論、卒業後もグラスファイバー会社、ゴムコーティングの会社の役員から最後は香料の会社の設立まで実に多彩だ。そこを貫く哲学は「出来るのは当たり前」という姿勢ではなかったか。

そんな岩田さんの生き様を見て、ニチメン卒業後、情報機器卸商社への転職、役員定年後その関連の情報機器小売会社社長、同業他社との合併、新会社の会長として株式の上場の統括と私自身も多彩で充実した第2、第3の人生を歩み続けることが出来た。岩田さんという格好のお手本のおかげでだと思っている。

遊びの面白さ、遊びの怖さ、遊びの空しさみた

いなものを教えていただいたのも岩田さんである。ここところは紙数の関係で詳述を省く。

「昭二」というお名前の通り、岩田さんは昭和2年（1927年）のお生まれで、昭和12年（1937年）生まれの私とは10歳の年齢差がある。

処が、今回の旅立ちの後落ち着いて思い起こしてみても、岩田さんから、お説教をされたとか、人生訓を聞かされた記憶はかいむである。

この様な事が、一番似合わない人柄のように思われる。

岩田さんとのお別れは突然やってきた。忘れもしない去年の11月29日の夕方奥様からの電話を頂いたとき、茫然自失して暫く言葉も出なかった。

つい10日前の11月18日には恒例のニチメンOB旅行で、山岸正雄さんの吉川市の別邸に1泊して、大いに飲み食い且つ唄って気炎を上げ、翌19日には東京駅でその日解禁となったばかりのボージョレヌーボーの赤ワインで乾杯し、イタ飯を食って別れたばかりではないか。これが31回目で、岩田さんとの最後と旅行なってしまった。今から8年前私が前記の合併新会社の役員として沼津市に赴任すると、岩田さんとは度々会食することとなり、グルメをもとめて伊豆箱根各地を巡り歩いた。

インドネシアで同じ釜の飯を食った、立古さんや山岸さんを誘い、増田源爾さん（故人）が加わり、高木秀明さんも参加され、不定期の日帰り会食が3ヶ月毎の一泊旅行へと発展し、定例化していったのだ。ブラジル時代の山邑陽一さん、後には牧洋生さんもメンバーとなって、北は北海道・東北から南は九州・関西へ、更には関西在住の主として繊維機械課OB/OGとの交歓へと交流の輪は広がっていったのである。

この旅行の企画・立案は行き掛かり上、私が一手に引き受けて、やらせて頂いた。気のあったレギュラーメンバーと楽しい旅行を満喫することが出来たと思っている。

次回32回目は今年の2月に伊豆大川での開催が決まっていて、全員が楽しみにしていた。

毎年、年末には箱根小涌谷の金型はこね荘に1泊して、過ぎし1年を締めくくる忘年会が7年間

も続いた。「安い、近い、楽しい」このはこね荘のみならず、同じ系列の金型かわじ荘（川治温泉）、同じく金型あかくら荘（赤倉温泉）の予約では長谷川洋さんに筆舌に尽くしがたいお世話になった。この場を借りて心から御礼を申し上げたい。

この3ヶ月に1回の旅行の合間にも数え切れないぐらいのお付き合いを頂いた。奥様同伴の際には家内も参加して、伊豆の温泉、京都の花見、ある時は立古さん、山岸さんや牧さんと三島で温泉＋うなぎ、また山邑さんと3人で京都での紅葉狩りと頻繁にお付き合いをいただいた。思い出は尽きることがない。

実は12月1日～3日には奥様とともに京都での紅葉見物が決まっていて、この間に辻井準一さんもお呼びして御一緒に会食する予定になっていた。そして12月7日には横浜市立大付属病院での心臓カテーテル検査のための検査入院を予約されていたのだ。

人生に「たら」は禁句だが、この検査のスケジュールがもう10日、つまり11月の27日になっていたら、岩田さんの突然旅立ちは回避できたのではないか、残念としかいいようがない。

仏典に「生老病死」ということばがある。生まれて、老いて、病に罹ってそして旅立を迎える。人間は、いや生きとし生きるものは全て有限の生命の中にあることは厳然たる事実であろう。

私は3年ほど前からケア付マンションに住んでいる。300人余の住人の平均年齢は男性が

79歳、女性が78歳である。人生のホームストレッチにさしかかった人達の集団の中にと、

ほぼ2ヶ月に1度は見聞する旅立のスタイルは実に千差万別だ。「病」から「死」へ到る時間が1日の人、10日の人、1ヶ月の人、半年、1年、3年、5年、7年、10年——と旅立までのリードタイムはまちまちだが、この時間が短いほど、残された関係者の嘆き、悲しみの度合いが深いように見受けられる。

5年、10年とリードタイムが長い旅立に較べて、疲労感、諦観、ある種の安堵感などが熟成される時間的余裕がないためではないか。

気持ちの落ち着き場所が見つからないのだ。旅立ちから120日、ここに来てようやくある種の精神的な整理の目処がついてきたところである。

「更に長生きをされたとして、介護士に付き添われた車椅子の岩田さんを見る勇気があるのか？寝たきりの岩田さんと会う自信はあるのか？お前の顔や名前すら忘れてしまった岩田さんを正視できるのか？」そんな自問自答を繰り返しながら、唐突ではあっても、いかにも岩田さんらしく、颯爽と旅立っていかれたという、どうしようもなく重たい既成事実を僅かながら今ようやく受け入れ始めたところである。

延び延びになっていた第32回ニチメンOB旅行会には、立古、山岸、牧、山邑、林のレギュラーメンバー5名が参加して、4月1日・2日と掛川に1泊して、同市の青林院に建立された岩田さんのお墓にお参りすることになっている。

今までやってきたように、大いに飲み、食い、唄い、賑やか大好き人間であった故人を偲び

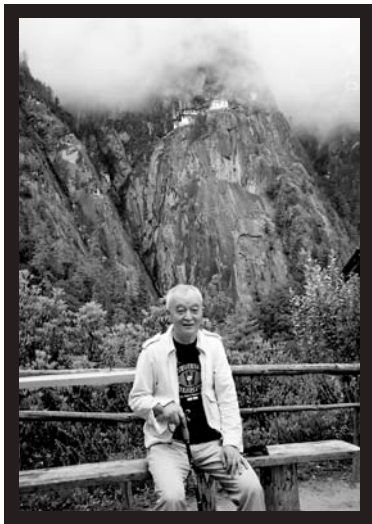
合掌



2009年11月20日 ニチメン湘南ぐるめ会にて 岩田さんにとって最後の午餐

「鉄をロマン」の柴田 豊君を悼む

藤 井 正之助



ブータンの山をバックに

み上げてきた。嗚呼、君はなぜそんなに急いでこの世を去り、天に召されたのか。

1962年早稲田大学冶金学科を卒業し、ニチメン鉄鋼輸出部に配属された君はデュッセルドルフ・ニューヨーク駐在を経て1995年、取締役役に昇進、1999年には小生からバトンを引き継ぎ、日本鋼管（現JFE）との合併会社である日本鉄鋼建材リース（株）の社長を2001年まで立派に勤められた。その間40年にわたり、君は一筋に「鉄をロマン」として文字通り寝食を忘れ、ニチメンとその関連会社の業容拡大のため頑張ってくれた。君が取締役鉄鋼本部長としてNYから帰国されたとき、君を知る同期の我々は皆、我が事のように喜び昇進を心から祝福したのが昨日のように思い出される。

1970－80年代は日本の鉄鋼業が飛躍的に発展し、大型の高炉が日本各地に建造され、製鋼技術の向上、技術開発に伴う自動車鋼板を中心とする高付加価値の鉄鋼商品が全世界を凌駕しはじめ、日本の貿易構造が軽工業から重工業に転換した時代であった。君はその変化の渦中であって「鉄」に対する持ち前の深い愛着と知見と情熱で次々と新製品の拡販と新市場への食い込みに邁進し並み居る鉄鋼先発大手商社に伍して着々と実績を上げてくれた。各高炉メーカーの幹部からの信頼も

2010年1月30日、元取締役鉄鋼本部長 柴田 豊氏が一年余りの闘病の後、他界された。享年71歳、死因は肺がん、と新聞は伝えた。

通夜の祭壇で今は亡き戦友のにこやかな笑みを浮かべた遺影を見た瞬間、思わず熱い涙がこ

厚く退職後もお付き合いを続けておられたと聞いている。

しかしそんな君に不運が襲ったのは1975年12月、得意先から支店への帰路、デュッセルドルフの郊外で対向車と正面衝突の自動車事故に会い九死に一生を得たが右足複雑骨折で、その後2度にわたる手術を通じて最後までその後遺症に悩まされ続けた半生であった。退院直後にデュッセルのご自宅に見舞いに行った時も「NATOのイギリス兵を殺つつけた」と強がりをいっていたが初めての駐在員生活が続けられなくなった無念さ悔しさがにじみ出ていた。

好きなスポーツはヨットで佐島マリーナに友人とともに愛艇「SPIO」を持ち、最近まで寸暇を見つけてクルージングを楽しんでおられた、と聞いている。

仕事のことで口論に及ぶと君は何時も軽妙洒落な冗句で周りの雰囲気を一気に和ませることも忘れなかった。

NY時代の君の功績はやはり1994年ミシシッピ州ジャクソン市で冷延鋼板などのサービスセンター NITEK METAL SERVICE の設立だろう。本社への説明のため、痛い足をかばいながら何度も東京へ足を運んでおられた。

退職後は母校の早稲田大学で勉学に勤しみ、2年前には野外研修でヒマラヤ山脈中の仏教の秘境ブータン王国まで出かけ、あの痛めた足で海拔3000mの女人禁制の聖地まで踏破したと聞き、自分も大いに刺激を受けたものです。

思い出を語れば限りなく、これで筆をおきますが 今は苦しみのない天国できっと何時ものオヤジギャグを元気に連発し周りを楽しませていてくれることを信じ、心からご冥福をお祈りいたします。

合掌。

訃 報

東京社友会物故者名簿（2009年10月1日～2010年4月30日）

	氏 名		死亡年月日	享 年
1	岩 田 昭 二	機 械	2009年11月29日	84歳
2	吉 村 文 夫	化 工	2010年1月12日	72歳
3	※臼 井 真 二	船 舶	2010年1月22日	61歳
4	※小 泉 正 康	鉄 質	2010年1月29日	80歳
5	柴 田 豊	鉄 質	2010年1月30日	71歳
6	谷 出 昌 夫	物 資	2010年3月27日	80歳
7	桜 井 晃 郎	鉄鋼国内	2009年8月	67歳

大阪社友会物故者名簿（2009年9月20日～2010年4月30日）

	氏 名		死亡年月日	享 年
1	※長 田 俊 三	経 理	2009年9月20日	87歳
2	※古 田 光 男	経 理	2009年10月13日	75歳
3	中 島 巖	織 維	2009年12月29日	80歳
4	疋 田 雄 三	化 工	2009年11月8日	75歳
5	花 木 良 三	総 務	2009年12月16日	73歳
6	富 田 源 蔵	機 械	2010年1月28日	71歳
7	※青 木 高 之	織 維	2010年4月6日	78歳
8	※木 村 泰 三	物 流	2009年3月	79歳
9	※太 田 操(旧姓浅田)		2009年8月	75歳
10	※山 田 芳 明	鉄 鋼	2010年4月	78歳

(※) は非会員

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



◎定時総会の議題～特に「会則の一部改訂」～について

7月24日（土）正午より如水会館で開催されるニチメン東京社友会 の定時総会では、当年度の事業報告、来年度の事業予算、任期満了に伴う役員全員の改選等が議題として提出されますが、他に、会則の一部改訂をご審議頂くことになっていますので、ここでは、改訂案の骨子について以下の通りお知らせします：

1. 会則第3条（事業）に「公式ウェブサイト（＝インターネット上の「ホームページ」）の開設・維持・運営」に関する項目を追加して業務内容をより明確にします。
2. 第5条（会員）について
 - ① ニチメンのグループ会社（子会社・関連会社等）に入社した人達が希望すれば社友会へ入会できるようにします。現在双日には社友会がなく、定年後はニチメン社友会に入りたいと希望する者が出て来る可能性がありますので、その人達に門戸を開くものです。
 - ② 「終身会員」の制度を設け、満年齢70歳以上の会員が年会費のほぼ7年分に相当する2万円を一括前納した場合、爾後、年会費の納入を一切免除することにします。
（但し、懇親会費等は別扱いです。） 対象は希望者のみですが、会費納入督促等の事務軽減に役立ち、また、会員にとっても毎年納入手続きをする煩わしさから解放され、さらに、長寿へのインセンティブの一つとなることを期待したいところです。
 - ③ 従来内規での取り扱いとなっていた「名誉会員」（＝「長寿会員」）に関する規定を会則に組み入れます。新しく88歳または99歳（いずれも数え年）になられた会員が対象です。
3. 第6条（役員）について
 - ① 現行規定では役員の任期は2年、但し再任（何回でも）OKとなっていますが、再任は原則2回を限度とし、通算の任期は原則6年までとするように改めます。役員の若返りを促進し、社友会業務の一層の活性化を図ることが狙いです。
 - ② 退任する役員は、後任が決定し、業務の引き継ぎが完了するまでは、（任期満了後も）その任にとどまるべきこと（但し最長6ヶ月を限度）を明記します。
4. 第11条（会員資格の喪失）を新設します。次のような場合を想定しています：
 - ① 会員が死亡した場合
 - ② 会員から退会の意思表示があり、退会届が受理された場合
 - ③ 正当な理由なく年会費の納入を2年以上怠った場合
 - ④ 会則第2条（本会の目的）に反する行為を行ったり、本会の名誉を著しく損なう行為を行ったりと判断される場合、世話人会がこれを認定し、会長が承認した場合。
5. 上記に伴い、現行の第11条（発効日）は、繰り下がって第12条となります。

以上

nmosnmos 大阪社友会ニュース nmosnmos

編 集 部

2010年度大阪社友会『新年互礼会』は、1月17日大阪中之島ビル（旧ニチメンビル）5 Fに130名余の会員の出席のもと、開催された。

双日株式会社からは土橋昭夫代表取締役会長をはじめ6名が賓客としてご出席。

11:00 白川晴朗代表世話人の司会によって開会。

田淵弘通会長の挨拶、双日(株)土橋会長のご挨拶と続き、次に会員の中の11名の米寿お祝い対象者にお祝いの贈呈があった。

代表答礼は、早瀬三郎さんによって為された。

11:30 田中義巳元社長・会長の乾杯の音頭で宴の幕は上がった。

宴の途中で、箏曲『箏アンサンブル・アイリス』の演奏が入り、雰囲気はいやが上にも盛り上がった。

初春を寿ぐ集まりもやがて時が過ぎ、木村幸史副会長の中締めで、お開きを迎えた。



【編集後記】

今年も早くもめぐって来た新緑の候。 ことしは何故か春は足早に立ち去ってしまった。

“春宵一刻値千金” どころか “値万金” と言えるほど短い春だった。

東京社友会のチャーター・メンバーであった岩田昭二副会長が昨年11月急逝された。

日課の朝の散歩の帰途、近くの公園で、死神に愛されてしまった。

岩田さんの後にくっついて社友会世話人になった筆者にとってショックは計り知れなかった。

同じく創立世話人会でお見受けした柴田豊さんも帰らぬ人になってしまった。

夫々、お二人の追悼文を本号に載せました。 ご高覧頂き故人を偲んでください。

毎度のことながら会員の寄稿文については、中味は読んでのお楽しみで、何がでてくるか分からない。牧洋生さんの“親子三代ニチメンマン・ストーリー”。在Dusseldorf齊藤勝義さんのMenkwa Gesellschaft (メンカ ゲゼルシャフト) 物語、いずれもニチメンの歴史の一端を今にして垣間見ることが出来る。

中川十郎さんもおいまなお衰えぬバイタリティーで、ビジネス情報学会で活躍し、ニチメンOBの名を高らしめている。

さて、last but not least、吾らにとって最も重要なこと、高木亨一さん寄稿の『フレディの遺言』－ 私がボケた時のお願い－ は、必読であります。

今夏の総会・懇親会は、P-2-1にご案内の通り、7月24日(土)、昨年と同じ“如水会館”で行われます。 ご出席をお待ちいたしております。 同封のハガキにて出欠をご連絡下さい。

(長谷川 洋)

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2-14-7
双日(株)内 東館17F

発行人	倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
印刷所	(有) 関 内	印刷